

環境汚染対策委員会ニュース



適切な下刈の効果があった工学部の西側斜面の林

その1

環境汚染対策委員会に設置されている専門委員会の委員が増員され、平成六年六月十七日に第一回専門委員会が開催されました。

環境汚染対策委員会委員長（茂里一弘^{ひろ}工学部長）から挨拶と専門委員会への環境保全に関連する五項目の諮問がありました。

諮問の内容は、これまでに専門委員会が行ってきた(1)「広大環境」、(2)「広島大学の環境保全のために」テキストの発行及び改訂に加え、(3)「キャンパスの環境蘇生・創造」についての提言、(4)「キャンパス内のゴミ処理対策」についての提言、そして(5)「環境汚染対策委員会」の委員会の名称及び規程等変更についてでした。

専門委員会としては、(3)「キャンパスの環境蘇生・創造」については先ず現況調査から始めることにしました。西条キャンパスへの統合移転が終局に近づいていること、今後は西条キャンパスの環境整備が重要になってくること等の理由から、西条キャンパスから始めることにし、近代的なキャンパス環境として安定期に達している他のキャンパスに順次拡げることになりました。今後、西条キャンパス内に残されている自然環境・環境蘇生・環境整備等についての委員会活動状況を、委員会ニュースとして提供します。

広島大学の全キャンパスについては、一九九四年から一九九六年にかけての「広島大学の四季（写真集）」編集発行そしてキャンパスの自然環境・環境蘇

生・環境整備「シンポジウム」、写真展等を環境汚染対策委員会主催で企画する予定です。大学構成員からもご提言とご意見をして写真、絵画の応募をお願いします。

環境汚染対策委員会

専門委員会副委員長

正藤英司（しょうとう・えいじ）

その2

— 風土にやさしい、生態実験園の環境蘇生 —

理学部の南側は小さな谷になっていて、山中池からぶどう池に注ぐ小川が流れています。小川に沿って水田跡があり、周りには松林が残っています。とても静かな空間となっています。このあたりは理学部の移転してきた一九九一年九月には荒れ放題で、とても人の近づける場所ではありませんでした。（注。このあたりは統合移転実施計画委員会により植物園の一部として承認された学術研究用地です。）

しかし、植生や地形からみてなかなか素質の良いものがあるので、生態実験園として利用することを考えました。一九九二年の夏から、茨や蔓を刈払う作業を始めました。一人では始めた作業は大変でしたが、秋には人が入れる状態にまでなり、その後協力者も増え、植物管理室の職員や植物学教室の人たちの応援もあり、見違えるような空間に生まれ変わりました。

生態実験園は多目的利用を考えたものです。広島大学のめざしている潤いのある空間づくりとは、「人と接することのできる緑の創造」であると自分な

りに理解し、どのような植生にすれば、人がそして動物等が近づいて来るのかをみる実験の場として整備しています。実験園に人が入れないように垣根で囲むなどのことは考えていません。気軽に入って見てください。やさしく触れてやってください。ただし、植物や動物を採っていくのは困ります。将来は花を摘んでも良いように増やしたいと考えています。

西条盆地の特徴である溜池や湿地の植物を集め、松林にツツジや草花を蘇らせ、土手にヒガンバナを植え、水田跡には水田とショウブ園を創るなどしています。トンボ、チョウや蛍そして野鳥などの動物も豊富になってきました。



水田跡での田植

一九九三年には水田を復活させて稲を植えました。二年目の今年も六月一日に理学部長などを招いて田植をしました。秋にはキャンパスの中心部で、稲の刈入れができそうです。

整備が進むにしたがって、生態実験園を利用するファンも増え、西条キャンパス自然愛好会(会長：西図書館の野村正人氏)などボランティア組織もでき、学内有志の協力体制も整いつつあります。

六月には蛍を見る会を数回開きました。写真でお見せできないのが残念です。六月二十日には生きた教材の提供を目的に附属幼稚園児を招待しました。



附属幼稚園の生態実験園見学会

附属幼稚園の年長組園児三十五名がトンボやチョウチョなどの見学にやってきました。園児たちは、トンボの羽化する光景を目の前で観察でき大変喜んでくれました。

六月初めには、一昨年工学部事務部

で計画実施された工学部西側斜面での下刈の効果があったのか、ササユリ約六十本が満開となりました。

このように、これまで誰一人寄り付かなかったこの場所に、自然と触れ合うことのできる潤いのある空間・風土を造る実験は成功しつつあります。

環境汚染対策委員会 専門委員

豊原太郎

(とよはら・げんたろう)



水田跡のショウブ園



アカデミック地区の中心部に開花したササユリ